

【参考資料2-1】令和4年度保護林モニタリング調査実施保護林に係る管理方針書(令和5年度第1回委員会意見反映版)

管理方針書 生物-3

(新)

名 称	九州中央山地生物群集保護林 <small>きゅうしゅうちゅうおうおうさんち</small>	管理(支)署	熊本森林管理署・熊本南部森林管理署・宮崎北部森林管理署
面 積 (ha)	保存地区:6,038.36	設定年月日	1994(平成6)年6月29日
		変更年月日	2018(平成30)年4月1日再編
位置及び区域 (森林生態系保護地域及び生物群集保護林においては保存地区、保全利用地区それぞれの位置及び区域)	熊本県 山都町 …大官山国有林 1027 ふ、林小班外 宮崎県 五ヶ瀬町 …波帰 国有林 2089 れ 林小班外 熊本県 八代市泉町…縦木 国有林 1134 い 林小班外 宮崎県 椎葉村 …狼谷 国有林 103 い 林小班外 熊本県 水上村 …鍵掛 国有林 2034 い、と 林小班外		

<p>保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項</p>	<p>保護・管理の対象は、九州中央部の連なった脊梁部に広がるスズタケ-ブナ群団、オオマルバノテンニンソウ-ブナ群落、サワグルミ群落、ツガ群落などの植生及びそこに生息・生育する生物群集(特徴的な植物相および動物相は別添のとおり)。保護林設定管理要領(平成27年9月28日付け27林国経第49号)第4の2の(2)のア.自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまともを持って存在する区域であって、原則として300ヘクタール以上の規模を有するものに該当。</p> <p>本保護林は、九州の中央部分の熊本・宮崎県境に位置する九州山地の脊梁部を中心に分布する。地質的には、付加体の秩父帯と四万十帯上にあり、砂泥質の堆積岩、チャート及び石灰岩が主体となっており、中央構造線上の石灰岩地には特異な植物が数多く生育している。</p> <p>林相は、ブナを主体とする落葉広葉樹が標高1,000m以上の山地に発達し、急傾斜地にはモミ、ツガ林が分布する。この地域には、ブナ林の南限地域に残存する最大規模の太平洋型ブナ林(スズタケ-ブナ群団)が、また湿性タイプのブナ林(オオマルバノテンニンソウ-ブナ群落)としては日本最大規模のものが九州中央山地山頂域に発達しているのが特徴。標高1,000m以下ではモミ、ツガ林がモザイク状に混生し、さらにウラジロガシ、アカガシを主とする常緑広葉樹が生育している。渓谷には、サワグルミ、シオジ、ケヤキ等の落葉広葉樹が生育している。山頂部は、雲霧に包まれることが多いため、着生植物やコケ類も多い。また、特別天然記念物のニホンカモシカ、天然記念物のヤマネ等の希少な野生動物も生息している。</p> <p>本保護林の保護・管理の基準・指標の一つとなる、モニタリング開始(2007(平成19)年度、2008(平成20)年度)以降の森林の状況は次のとおり。</p> <p>2007(平成19)年度、2008(平成20)年度のモニタリング基礎調査では、従来の植生、林相が維持されていたがシカ被害が顕著な箇所も多く、スズタケのほか、低木層の衰退が見られた。</p> <p>2012(平成24)、2017(平成29)年度のモニタリング調査では主たる保存対象種であるブナは概ね大径化した立木が多く、その下に後継樹も見られた。しかし、シカ被害レベルが4のプロットが出現・増加するなどシカ被害は進行した。その一方で上福根山と烏帽子岳などシカ被害レベルが低い地域も見られ、ばらつきが大きかった。</p> <p>2022(令和4)年度の調査では、ブナ立木自体は概ね健全であったが、尾根上の大径木を中心に一部枯損が確認され、また低木層が衰退・欠落しているモニタリング区が多く存在した。これまでシカ被害レベルが低かった上福根山と烏帽子岳でも、スズタケの枯死、矮小化が確認され、大幅に植被率の低下が見られた。ばらつきは依然見られるものの、プロットのシカ被害レベルは3または4と拡大傾向を示した。この他、病虫害としてブナハバチによる食害、気象害として風倒木や大雨による斜面崩壊も確認された。また、希少種として、哺乳類はムササビ、鳥類は留鳥のアカヤマドリ、ツミ等の5種、昆虫類はアキアカネ、エゾハルゼミ等の6種が確認された。</p>
<p>保護・管理及び利用に関する事項</p>	<p>本保護林では、自然植生として広く分布するスズタケ-ブナ群団、オオマルバノテンニンソウ-ブナ群落、サワグルミ群落、ツガ群落などの植生及びそこに生息・生育する生物群集の保全に必要な環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領に定められた生物群集保護林の取扱い方針に従うとともに、これまでの保護林モニタリング調査結果を踏まえて以下のとおり取り扱うこととする。</p> <p>本保護林では、平成30年度以降では、平成30年度、令和2年度、令和3年度に新規の植生保護柵を設置している。モニタリング結果を踏まえ、下層植生の回復及び被害拡大防止を図るため、既設植生保護柵の維持・管理を継続する。また、各鳥獣保護区や国定公園の指定とも重複している区域が含まれており、これらの指定管理機関や各シカ被害対策協定の協定者に対し、保護林及びその周辺におけるシカ捕獲の実施協力を呼びかけるとともに、シカ被害レベルが高いものの高木層が健全でスズタケや希少種が確認される箇所を優先して小規模な植生保護柵の拡充を検討する。</p> <p>この他、ブナハバチによる被害が生じていることから、引き続き国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所とも連携して発生状況を注視していくこととする。今後、ブナハバチの被害が、ハバチや天敵の発生サイクルやシカ被害の状況から甚大化することが予測される場合は、樹幹をよじ登る幼虫を粘着シートで捕獲することなどの応急的な防除等を検討する。</p>

モニタリングの実施間隔及び留意事項	5年、道路受災のため到達困難地となったプロットの調査中止およびフォローについて再検討
法令等に基づく指定概況	保安林(水源涵養・保健)、九州中央山地国定公園(特保・特1・特2・特3)、矢部周辺県立自然公園(特3)、鳥獣保護区(特別保護・普通)
その他留意事項	<p>1969(昭和44)年3月31日設定 旧名称「国見岳風致保護林」 741.04ha  1971(昭和46)年3月31日設定 旧名称「五家荘風致保護林」 1,085.42ha  1971(昭和46)年3月31日設定 旧名称「水上風致保護林」 130.24ha  1977(昭和52)年3月31日設定 旧名称「御池学術参考保護林」 204.20ha  1994(平成6)年6月29日設定 九州中央山地森林生物遺伝資源保存林(上記4保護林を含めて拡充)  2018(平成30)年4月1日 九州中央山地森林生物遺伝資源保存林を九州中央山地生物群集保護林に再編(「保護林制度の改正について」(平成27年9月28日付け27林国経第49号)による)</p>

(九州中央山地生物群集保護林)保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項

－ 植物相及び動物相 －

1 植物相

(1)本保護林の植生の概況等

本保護林は、九州の中央部分の熊本・宮崎県境に位置する九州山地の脊梁部を中心に分布する。植生は、ブナを主体とする落葉広葉樹が標高1,000m以上の山地に発達し、急傾斜地にはモミ、ツガ林が分布する。標高1,000m以下ではモミ、ツガ林がモザイク状に混生し、さらにウラジロガシ、アカガシを主とする常緑広葉樹が生育している。渓谷には、サウグルミ、シオジ、ケヤキ等の落葉広葉樹が生育している。山頂部は、雲霧に包まれることが多いため、着生植物やコケ類も多い。石灰岩地には他に見られないイワギク・ヤハズハハコ・ヒロハノヘビニボラズ等の特異な植物が生育している。特徴的な植生相としては、ブナ林の南限地域に残存する最大規模の太平洋型ブナ林(スズタケ-ブナ群団)が、また湿性タイプのブナ林(オオマルバノテンニンソウ-ブナ群落)としては日本最大規模のものが九州中央山地山頂域に分布していることである。

(2) 群集

本保護林の主な植生群集等は次のとおり。

ア スズタケ-ブナ群団

この群団の特徴は林床にスズタケなどのササ類が密生し、生育する植物種群が少ないことがあげられるが、現在ではシカによる食害と開花枯損によりスズタケなどのササ類や下層植生がほとんど見ることができない状況の箇所が多くなっている。一方で、低木層を構成したスズタケの開花枯死に伴い、林床照度が高くなり草本層の出現種数が増加した箇所も見られている。

高木層及び亜高木層はブナ、ミズナラ、アサガラ、ヒメシャラ、コハウチワカエデ、コミネカエデ、イタヤカエデ、アオダモ、クマシデ、ヤマグルマ、マンサクなどからなる。低木層はスズタケが優占するがシカ被害により衰退している箇所も多く、その他、マユミ、タンナサウフタギ、バイケイソウ、シロモジ、ツクシシャクナゲ、オカメノキ、マンサク、チドリノキ、クサギ、ミツバウツギが見られる。草本層は矮小化したスズタケの他、スゲ属、コバノイシカグマ、ミヤマタニソバ、ハイノキ、ツクシシャクナゲ、ヤマカモジグサ、ツクシアザミ、レイジンソウが見られる。

イ オオマルバノテンニンソウ-ブナ群落

この群集は山頂に近い広い尾根上地に分布し、時にササ類を全く欠くか、ササ類の勢力が弱く高茎草原上の林床を持つブナ林である。この群集ではシカの忌避植物以外の下層植生を見ることが難しくなっている。

高木層はブナが優先する林分が多いが、ヒメシャラ、ウリハダカエデ、コハウチワカエデ、ハリギリ、ミズキ、アサガラ、シナノキなどのブナ以外の夏緑広葉樹類が高い植生率で高木層・亜高木層に混成しているのが特徴である。低木層にはタンナサウフタギ、シロモジ、ツリバナ、オオカメノキなどのほかに、湿性の低木類であるヤマアジサイ、ウリノキ、サイゴクイボタなどを混生している。林床の草本層ではスズタケの被度が高い箇所でもスズタケの背丈は低く、本来はトチバニンジン、シシウド、アキチヨウジ、ミヤマウグラ、モミジガサ、オオマルバノテンニンソウなどの多くの種群が見られる。

ウ サウグルミ群落

高木層及び亜高木層は、サウグルミ、コハウチワカエデ、コミネカエデ、シナノキなどからなる。低木層はコハウチワカエデ、アオダモ、タンナサウフタギなどが見られ、草本層は衰退している箇所もあり、イ(イグサ)、ヒメチドメ、コバノイシカグマなどが優占し、その他ヒメシャラの実生やシロモジ、ヤマイヌワラビなどが見られる。

## エ ツガ群落

高木層及び亜高木層はツガ、イヌブナ、ミズメ、シナノキなどからなる。低木層はハイノキ、シキミが優占し、アセビも見られる。草本層は矮小化したスズタケなどが見られる。

### (3) 希少な植物

現地調査(2017(平成29)、2022(令和4)年度モニタリング調査)では、環境省レッドリスト2020に掲載された絶滅危惧種が4種(高ランク種はチョウセンナニワズ(VU))、熊本県レッドデータブック2019に掲載された絶滅危惧種が13種(高ランク種はジガバチソウ、ミチシバ(CR)、フウリンウメモドキ、ミヤマイボタ、ヤシャビシャク(EN))、宮崎県レッドデータブック2015に掲載された絶滅危惧種が37種(高ランク種はハスノハイチゴ、ドウダンツツジ、レイジンソウ、ジガバチソウ、チゴユリ(CR-r)、オウレンシダ、チョウセンナニワズ、カラクサシダ(EN-r)、ミヤコザサ、ヤシャビシャク(EN-g))が確認された。

## 2 動物相

### (1) 哺乳類

文献調査(九州中央山地の植物(平田正一、1971(昭和46)年))の結果、九州中央山地(椎葉地域)において以下の6目10科13種の哺乳類が確認された。

キクガシラコウモリ、ニホンザル、ノウサギ、ムササビ、ドブネズミ、タヌキ、ホンドキツネ、ホンドテン(キテン、スステン)、ニホンイタチ、ニホンアナグマ、イノシシ、ニホンジカ

現地調査(2017(平成29)、2022(令和4)年度モニタリング調査)の結果、以下の5目8科10種が確認された。なお、熊本県レッドデータブック2019や宮崎県レッドリスト2020等に掲載されている種は、ムササビの1種であった。

ムササビ、ノウサギ、ムササビ、ネズミ(spp.)、タヌキ、ホンドテン、ニホンアナグマ、イノシシ、ニホンジカ、コウベモグラ、ノイヌ

### (2) 鳥類

文献調査(第3回自然環境保全基礎調査動植物分布調査報告書)の結果、本保護林と重複する図郭において、8目13科45種が確認された。

現地調査(2017(平成29)、2022(令和4)年度モニタリング調査)の結果、以下の9目23科49種が確認された。

【希少種(国内、熊本県及び宮崎県における)】※①種の保存法、②環境省レッドリスト2020、③熊本県レッドデータブック2019、④宮崎県レッドデータブック2020

アカヤマドリ(②NT、③VU、④NT-g)、ジュウイチ、ツツドリ(③VU、④NT-r)、カッコウ(③NT、④NT-g)、ツミ(③NT、④NT-r)、クマタカ(①国内、②EN、③VU、④VU-g)、オオアカゲラ(③VU、④NT-g)、コノハズク(③EN、④EN-r)、オオコノハズク(③EN、④DD-1)、フクロウ(③VU、④VU-g)、ホシガラス(③AN、④VU-r)、トラツグミ(④VU-g)、クロツグミ(③EN、④NT-r)、コマドリ(③CR、④EN-r)、ルリビタキ(④DD-2)、オオルリ(③NT、④NT-g)、キビタキ(③CS、④NT-g)

### 【普通種】

キジバト、アオバト、ホトトギス、トビ、コゲラ、アオゲラ、キツツキ(spp.)、サンショウクイ、リュウキュウサンショウクイ、モズ、カケス、ハシブトガラス、キセキレイ、コガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、ヒレンジャク、ゴジュウカラ、ミソサザイ、ツグミ、アトリ、ウソ、イカル、ホオジロ、アオジ、ゴイサギ、アマツバメ

### 【特定外来生物】

ソウシチョウ

(3)両生類

文献調査(第5回自然環境保全基礎調査動植物分布調査報告書)の結果、本保護林と重複する図郭において、2目6科8種(ベッコウサンショウウオ、ブチサンショウウオ、ニホンヒキガエル、トノサマガエル、タゴガエル、ヌマガエル、カジカガエル、アマガエル)が確認された。

現地調査(2017(平成29)、2022(令和4)年度モニタリング調査)の結果、以下の2目4科4種が確認された。なお、環境省レッドリスト2020、熊本県レッドデータブック2019や宮崎県レッドリスト2020等に掲載されている種は、アカハライモリ、ニホンヒキガエル、タゴガエルの3種であった。

アカハライモリ、ニホンヒキガエル、タゴガエル、シュレーゲルアオガエル

(4)爬虫類

現地調査(2017(平成29)年度モニタリング調査)の結果、以下の1目2科3種が確認された。

ニホントカゲ、シマヘビ、ヒバカリ

(5)昆虫類

文献調査(第5回自然環境保全基礎調査動植物分布調査報告書)の結果、本保護林と重複する図郭において、トンボの仲間が5種、チョウの仲間が59種、セミの仲間が2種、ガの仲間が22種、甲虫の仲間が81種確認された。

現地調査(2017(平成29)、2022(令和4)年度モニタリング調査)の結果、9目37科95種が確認された。なお、環境省レッドリスト2020、熊本県レッドデータブック2019や宮崎県レッドリスト2020等に掲載されている種は14種であった。

出典:

- ・林野庁九州森林管理局(2022(令和4))令和4年度保護林モニタリング調査等及び保護林管理委員会運営業務報告書
- ・平田正一(1971(昭和46))九州中央山地の植物
- ・環境省(1988(昭和63))第3回自然環境保全基礎調査動植物分布調査報告書
- ・環境省(2002(平成14))第5回自然環境保全基礎調査動植物分布調査報告書

管理方針書 生物-5

(新)

名 称	おにめやま 鬼の目山生物群集保護林	管理(支)署	宮崎北部森林管理署
面 積 (ha)	保存地区:472.72 保全利用地区:12.34	設定年月日	1991(平成3)年3月31日
		変更年月日	2022(令和4)年4月1日拡張
位置及び区域 (森林生態系保護地域 及び生物群集保護林 においては保存地区、 保全利用地区それぞ れの位置及び区域)	宮崎県 延岡市北方町 渡瀬国有林 2015~2017 全小班、 2018 い~そ、 2019 へ~る、イ、ロ 林小班		

<p>保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項</p>	<p>保護・管理の対象は、地域固有の天然生スギをはじめ、アカマツ、ヒメコマツ、ブナ、アカシデ、ミズナラ等による針広混交林からなる自然環境及びそこに生育・生息する生物群集(特徴的な植物相および動物相は別添のとおり)。保護林設定管理要領(平成27年9月28日付け27林国経第49号)第2の(2)のア. 自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域であって、原則として300ヘクタール以上の規模を有するものに該当。</p> <p>本保護林は、宮崎県の北部、延岡市北方町祖母・傾国定公園の南東部に位置し、鬼の目山(標高1,491m)の西側からだき山(標高1,420m)にかけての斜面の中腹から上部に分布している。この周辺の地質は、中生代白亜紀の四万十累層群に貫入した第三紀中新統の花崗岩(大崩山花崗岩類)である。地形的には大崩山系に属し、大起伏山地である。土壌型は褐色森林土である。</p> <p>林相は、スギ、アカマツ、ヒメコマツ、ブナ、アカシデ、ミズナラ等による針広混交林である。このうち、人工林地以外に生育するスギは、1985年の宮崎大学の詳細な調査により最終氷期以降に生き残った天然スギ遺存集団であることが明らかにされ、加えて、最近の遺伝子型データ解析の結果、ウラスギ系と分かるなど、九州では屋久島以外で遺伝的多様性の高い天然スギ地域集団として極めて貴重である。このうちの1本「鬼の目スギ」は、「森の巨人たち百選」に選ばれている。また、林床には、ヒメシャラ、リョウブ、スズタケなどのほか、高木構成種の幼木も見られる。林内にはツチビノキ等地域固有種が多く含まれており、この点でも学術的価値が高いとされる。</p> <p>本保護林の保護・管理の基準・指標の一つとなる、モニタリング開始以降の森林の状況は次のとおり。</p> <p>2012(平成24)年度の調査では、主にリョウブとヒメシャラへのニホンジカによる剥皮被害が確認された。ニホンジカによる草本層のスズタケへの食痕が確認されたプロットについてはシカ被害レベル1、スズタケへの食害がさらに進み、部分的に裸地になっている場所があるプロットについては、シカ被害レベル2と判定された。</p> <p>2017(平成29)年度のモニタリング調査では、植生保護柵内に位置するプロットについてはシカ被害レベル0、その他のプロットについては、ニホンジカによるヒメシャラ等への剥皮被害が確認され、草本層のスズタケが枯死・矮小化しており、シカ被害レベル3であった。</p> <p>2022(令和4)年度のモニタリング調査では、保護対象樹種のスギ(天然の個体)、アカマツ、ヒメコマツ等の生育は概ね健全であったが、林冠構成種の後継個体となる幼木の欠落が目立った。2012(平成24)年度の調査からシカによる植生被害が見られており、植生保護柵設置箇所以外では、下層植生は貧弱で林内の見通しがよく、ニホンジカによる下層植生への被害が顕著であり、シカ被害レベルは3と評価された。また、2017(平成29)年度調査時に保護林内全域にわたって開花・枯死が確認されたスズタケは、シカの食害もあり、植生保護柵内を除き、大半の地域で欠落又矮小化していた。この他、気象害として、小規模な山腹斜面崩壊が見られた。一方、鳥類(クマタカ)や昆虫類の希少種が多数確認された。</p>
<p>保護・管理及び利用に関する事項</p>	<p>本保護林では、地域固有の天然生スギをはじめ、アカマツ、ヒメコマツ、ブナ、アカシデ、ミズナラ等による針広混交林からなる自然環境及びそこに生育・生息する生物群集の保全に必要な環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領に定められた生物群集保護林の取扱い方針に従うとともに、これまでの保護林モニタリング調査結果を踏まえて以下のとおり取り扱うこととする。</p> <p>なお、保護林制度改正時には区域面積全体をそのまま保存地区としていたが、保護林設定管理要領に基づき、2022(令和4)年度に保護林区域の拡張とともに、保存地区と保全利用地区へと地帯区分を見直した。</p> <p>本保護林では、平成30年度以降も毎年新規の植生保護柵を設置している。モニタリング結果を踏まえ、下層植生の回復及び被害拡大防止を図るため、引き続き地元ボランティア団体との協働により既設の植生保護柵の維持・管理を行うとともに、スズタケ生育地周辺など土壌保全による芽生えとその生育が見込まれる箇所において、植生保護柵の設置を検討する。</p>



モニタリングの実施間隔及び留意事項	5年
法令等に基づく指定概況	保安林(水源涵養)、祖母傾国定公園(特3)、祖母傾県立自然公園(普通)
その他留意事項	1986(昭和61)年3月31日設定 旧名称「鬼の目山学術参考保護林」 1991(平成3)年3月31日再編 旧名称「鬼の目山林木遺伝資源保存林」 2018(平成30)年4月1日「鬼の目山林木遺伝資源保存林」を「鬼の目山生物群集保護林」に再編(「保護林制度の改正について」(平成27年9月28日付け27林国経第49号)による)

(鬼の目山生物群集保護林)保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項  
－ 植物相及び動物相 －

1 植物相

(1)本保護林の植生の概況等

本保護林は、宮崎県の北部、鬼の目山(1,491m)の西側からだき山(標高1,420m)にかけて位置し、祖母・傾国定公園の南東部に位置している。林相は、スギ、アカマツ、ヒメコマツ、ブナ、アカシデ、ミズナラ等による針広混交林である。このうち、特に林内に生育するスギは、1985年の宮崎大学の詳細な調査により最終氷期以降に生き残った天然スギ遺存集団の可能性が高いとの報告がある。加えて、最近の遺伝子解析の結果、ウラスギ系と分かるなど、九州では屋久島以外で遺伝的多様性の高い天然スギ地域集団として極めて貴重である。また、林内にはツチビノキ等地域固有な植生が多く含まれており、この点でも学術的価値が高いとされる。林床には、ヒメシャラ、リョウブ、スズタケなどのほか、高木構成種の幼木も見られる。

(2) 群集

本保護林の主な植生群集等は次のとおり。

ア ツガ群落

高木層及び亜高木層はツガ、ヒメコマツ、アカマツ、ミズナラ、コハクウンボク、ナツツバキなどからなる。草本層はヒメシャラ、スズタケ、リョウブ、ベニドウダンなどが見られる。

イ スズタケ-ブナ群団

高木層及び亜高木層はミズナラ、ブナ、イヌシデなどが見られる。低木層はススキ、リョウブ、シロモジ、イヌツゲ、ミズナラなどが見られる。草本層はススキ、リョウブ、ヒナスゲ、ヒメシャラ、ブナ、ミズナラ、スズタケなどが見られる。

ウ ミズナラ群落

高木層及び亜高木層はミズナラ、コシアブラ、ベニドウダン、ツガ、ブナ、スギなどが見られる。低木層はアセビ、タンナサワフタギ、ツタウルシ、スギ、シキミなどが見られる。草本層はヒナスゲ、アカシデ、イヌツゲ、アシボソ、イヌシデ、アセビ、コミネカエデ、ヤマツツジなどが見られる。沢部の露岩にはケイビランが見られた。

エ ミヤマシキミ-アカガシ群集

高木層及び亜高木層はツガ、ミズナラ、ヒメコマツなどが見られる。低木層はハイノキや天然スギが見られた。草本層はハイノキ、シンガシラ、リョウブ、イワガラミが見られる。

(3) 希少な植物

現地調査(2017(平成29)、2022(令和4)年度モニタリング調査)では、環境省レッドリスト2015に掲載された絶滅危惧種が5種(高ランク種はツチビノキ、ツクシトウヒレン(EN))、宮崎県版レッドデータブック2015年に掲載された種が17種(高ランク種は、ドウダンツツジ、ツチビノキ、ツクシトウヒレン(CR-r)、チャボシライトソウ、オオヤマレンゲ、ヨウラクツツジ(EN-r)、ササユリ、ダイモンジソウ(EN-g))が確認された。

## 2 動物相

### (1) 哺乳類

祖母・傾ユネスコエコパーク資料によると、祖母・傾生物圏保存地域(鬼の目山は緩衝地域に属している)において以下の7目16科39種が確認された。トガリネズミ科2種、モグラ科3種、キクガシラコウモリ科2種、ヒナコウモリ科8種、オヒキコウモリ科1種、オナガザル科1種、ヤマネ科1種、ネズミ科8種、リス科2種、ウサギ科1種、イヌ科2種、アライグマ科1種、イタチ科4種、シカ科1種、イノシシ科1種、ウシ科1種。

現地調査(2022(令和4)年度モニタリング調査)では、以下の3目5科7種が確認された。ノウサギ、タヌキ、テン、ニホンアナグマ、イタチ属(spp.)、イノシシ、ニホンジカ

### (2) 鳥類

祖母・傾ユネスコエコパーク資料によると、祖母・傾生物圏保存地域(鬼の目山は緩衝地域に属している)において20目52科170種が確認された。

現地調査(2022(令和4)年度モニタリング調査)では、以下の7目17科27種が確認された。

【希少種(国内、宮崎県における)】※①種の保存法、②環境省レッドリスト2020、③宮崎県レッドデータブック2020

アカヤマドリ(②NT、③NT-g)、ジュウイチ(③NT-r)、クマタカ(①国内、②EN、③VU-g)、コノハズク(③CR-d)、オオアカゲラ(③NT-g)、ホシガラス(③VU-r)、トラツグミ(③VU-g)、ルリビタキ(③DD-2)、キビタキ(③NT-g)、オオルリ(③NT-g)

【普通種】

キジバト、アオバト、コゲラ、アオゲラ、カケス、ハシブトガラス、コガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、ゴジュウカラ、ミソサザイ、キセキレイ

【特定外来生物】

ソウシチョウ

### (3) 爬虫類

祖母・傾ユネスコエコパーク資料によると、祖母・傾生物圏保存地域(鬼の目山は緩衝地域に属している)において2目9科14種(クサガメ、ニホンイシガメ、ミシシッピアカミミガメ、ニホンスッポン、ニホンヤモリ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、タカチホヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、シマヘビ、ヒバカリ、ヤマカガシ、ニホンマムシ)が確認された。

現地調査2022(令和4)年度モニタリング調査の結果、以下の1目1科1種が確認された。

ニホンマムシ

### (4) 両生類

祖母・傾ユネスコエコパーク資料によると、祖母・傾生物圏保存地域において2目7科16種(オオイタサンショウウオ、コガタブチサンショウウオ、ソボサンショウウオ、ベッコウサンショウウオ、アカハライモリ、ニホンヒキガエル、ニホンアマガエル、タゴガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、ウシガエル、ツチガエル、トノサマガエル、ヌマガエル、シュレーゲルアオガエル、カジカガエル)が確認された。

現地調査2022(令和4)年度モニタリング調査の結果、以下の1目2科2種が確認された。なお、環境省レッドリスト2020、宮崎県レッドリスト2020等に掲載されている種は、ニホンヒキガエルの1種であった。

ニホンヒキガエル、タゴガエル

(5) 昆虫類

祖母・傾ユネスコエコパーク資料によると、祖母・傾生物圏保存地域において18目291科4,080種が確認された。

現地調査(2022(令和4)年度モニタリング調査)の結果、8目37科63種が確認された。なお、環境省レッドリスト2020、宮崎県レッドリスト2020等に掲載されている種は2種であった。

出典:

- ・林野庁九州森林管理局(2022)令和4年度保護林モニタリング調査等及び保護林管理委員会運営業務報告書
- ・祖母傾ユネスコエコパーク資料
- ・中尾登志雄・黒木嘉久・細山田典昭・外山三郎(1986)九州本土の天然杉—大崩山系鬼ノ目山のスギ群落—

管理方針書 生物-8

(新)

名 称	いのほえ 猪八重照葉樹林生物群集保護林	管理(支)署	宮崎南部森林管理署
面 積 (ha)	保存地区:402.38 保全利用地区:78.41	設定年月日	2020(平成30)年9月5日
		変更年月日	
位置及び区域 (森林生態系保護地域 及び生物群集保護林 においては保存地区、 保全利用地区それぞ れの位置及び区域)	宮崎県 日南市 北郷町 大荷田国有林 143 林班 い小班外 海一郷国有林 1036 林班 る1小班外		

<p>保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項</p>	<p>保護・管理の対象の生物群集は、ウラジログシ群落、アカガシ群落、ハナガガシ群落、イスノキーウラジログシ群集、ミヤマシキミーアカガシ群集で構成される常緑広葉樹林及びそこに生育・生息する生物群集(特徴的な植物相および動物相は別添のとおり)。保護林設定管理要領(平成27年9月28日付け27林国経第49号)第4の2の(2)のア. 自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域であって、原則として300ヘクタール以上の規模を有するものに該当。</p> <p>なお、本保護林の南側には観光客が多く訪れる猪八重溪谷があり、散策に利用されている。</p> <p>本保護林は、宮崎県日南市北郷町北東部に位置しており、広渡川支流である猪八重川の源流部にあたり、鶏戸山地の最高峰岩壺山(標高737m)の西側斜面に広がる照葉樹林で、標高約250mから700m付近まで連続している非常に発達した天然林が見られる。この地域の表層地質は、宮崎層群を構成する砂岩泥岩互層で、ほとんどが厚さ数十cm以下の砂岩と泥岩の規則的な互層であるが、一部、砂岩、泥岩だけの露頭もみられる。岩壺山斜面上部の沢では、階段状の砂岩泥岩互層が見られ、砂岩と泥岩では浸食される速度が違いため、砂岩層が突出し、泥岩層が少し凹んでいる。</p> <p>林相は、ウラジログシ群落、アカガシ群落、ハナガガシ群落、イスノキーウラジログシ群集、ミヤマシキミーアカガシ群集などによって構成される常緑広葉樹林であり、モミヤツガの大径木も生育している。また、谷部はイチイガシの大径木が生育する老齢林の林相、斜面部は胸高直径が小さく成熟段階の比較的若い二次林的な林相を呈する。特に低標高部は胸高直径1m前後、樹高30m前後のイチイガシの巨木が優占する原生的な照葉樹林である。このような原生的な照葉樹林を生育の場とする動植物も多く、植物では巨木に着生するランやシダ、さらに地生シダ・地生ラン・寄生生物・菌従属栄養植物なども生育しており、大径木の樹洞をねぐらとするムササビ等哺乳類、クマタカ等鳥類、昆虫類なども生息しており、我が国を代表する生物多様性が高い照葉樹林として極めて高い価値を有する。</p> <p>本保護林の保護・管理の基準・指標の一つとなる、モニタリング開始以降の森林の状況は次のとおり。</p> <p>2022(令和4)年度のモニタリング調査では、照葉樹林を構成するアカガシ、スダジイ、イスノキ、ハナガガシ、ウラジログシ、イチイガシの生育は健全であった。保護林内にニホンジカの採食による影響は確認されなかったが、周辺地域(保護林の北西側)ではニホンジカの鳴き声や剥皮被害が確認された。また、枯損に至ったものは確認されていないが、調査区域内の4本の立木(マテバシイ、ウラジログシ)にカシノナガキクイムシによる穿孔跡が確認されたほか、調査年度に発生した台風の影響による斜面崩壊や高木の倒伏等が発生していた。</p>
<p>保護・管理及び利用に関する事項</p>	<p>本保護林では、ウラジログシ群落、アカガシ群落、ハナガガシ群落、イスノキーウラジログシ群集、ミヤマシキミーアカガシ群集で構成される常緑広葉樹林及びそこに生育・生息する生物群集の保全に必要な環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領に定められた生物群集保護林の取扱い方針に従うとともに、本保護林設定にあたり行った森林基礎調査結果および2022(令和4)年度の保護林モニタリング調査結果を踏まえて以下のとおり対応する。</p> <p>当保護林内にニホンジカの採食による影響は確認されていないが、周辺(北西側など)地域でニホンジカによる剥皮や鳴き声が確認されているため、今後も侵入状況について巡視や保護林内及び周辺に設置の自動撮影カメラによる監視を行うとともに、保護林周辺における署事業によるシカ捕獲を継続して実施する。また、近年、九州各地でカシノナガキクイムシによるナラ類集団枯損被害の発生が見られ、本保護林内でも一部の樹木個体にカシノナガキクイムシによる穿孔が確認されているため、大径木の多い当保護林内の継続モニタリングを行い、必要に応じて対策を実施する。</p> <p>保護林内の北側には人工林が約10ha存在するが、複層林施業等を適切に実施しながら、将来的には天然林への誘導を図ることとする。なお、保存地区内の小規模スギ林は、歴史的、文化的観点等から、基本的には残置し、現在の環境を維持する。</p> <p>また、レクリエーションの利用状況や保護林への影響の有無の把握に努め、利用による植生への影響が懸念される場合は、利用区域の見直しや利用者に注意喚起するなど踏圧防止等の対策を講じる。さらに、保護林内に生息・生育する希少野生動植物の盗採・密猟等への対応策として、監視活動を継続する。</p>

モニタリングの実施間隔及び留意事項	5年
法令等に基づく指定概況	保安林(水源涵養・保健)、わにつか県立自然公園(普通)、鳥獣保護区(普通)
その他留意事項	

(猪八重照葉樹林生物群集保護林)保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項

－ 植物相及び動物相 －

1 植物相

(1) 本保護林の植生の概況等

当該地域は岩壺山(標高737m)から南北にのびる尾根から西側へ猪八重溪谷まで続く急峻な地形の山塊である。林相は、標高、地形に応じてウラジロガシ群落、アカガシ群落、ハナガガシ群落、イスノキ-ウラジロガシ群集、ミヤマシキミ-アカガシ群集などによって構成される常緑広葉樹林であり、成熟から老齢段階の様相を呈し、保護林内にはモミやツガの大径木も生育する。また、本地域の照葉樹林では、標高約200mから700mまで連続する非常に林層構造が発達した天然林が一部に見られる。

現在、我が国では、このようにまとまった形で照葉樹林が残されている地域はほとんどなく、当該地域は極めて貴重な森林であるといえる。

(2) 照葉樹林の構成種

保護対象である照葉樹林を構成する種として、以下のような林内構造となっている。

・高木層

アカガシ、スタジイ、イスノキ、ハナガガシ、ウラジロガシ、イチイガシなどが確認されている。また、多くの沢の発達に伴い急傾斜地が多く、そのやせ尾根には大径のモミやツガが生育。

・低木層

スタジイ、ホソバタブ、アオキ、ハナガガシ、ヤブツバキ、イスノキ、カンザブロウノキなどが優占。植被率は高い。

・草本層

林床が湿潤な環境であり、常緑広葉樹林下でも植被率はやや高く、コバノカナワラビやイズセンリョウなどの常緑性の植物が優占。また、イスノキやヒサカキ、ミヤマシキミなど木本種も生育。

・その他

谷部で土壌の条件が良い箇所には、菌従属栄養植物やエビネ属、着生ラン、地生ランをはじめ、希少な植物が生育。

(3) 垂直分布における優占種

・猪八重溪谷～標高450m:高木層はイチイガシ、コジイ、スタジイ、タブノキ等が優占。特にイチイガシの大径木等は壮大な森林景観を醸し出している。

・標高450～700m(岩壺山稜線以西支尾根):モミ、ツガが優占。

・標高550～737m(岩壺山尾根、山腹):アカガシ、イスノキが優占。

・その他(東側谷筋の崖錘地):ホソバタブ、バリバリノキが優占。



#### (4) 猪八重照葉樹林生物群集の植物相

本保護林において、維管束植物は124科505種が確認されている(森林基礎調査業務報告書(H29))(一部猪八重溪谷を含む)。原生的な照葉樹林が残っていることから、多様な植物が生育しており、希少な植物も多く含まれている。

##### ・着生植物・・・多様性が非常に高い。

着生シダ(21種):ナンカクラン、ヒモラン、スギラン、マツバラン、オオタニワタリなど

着生ラン(11種):マメヅタラン、ムギラン、ミヤマムギラン、セッコク、キバナセッコク、オサラン、フウラン、ボウラン、オオバヨウラクラン、カシノキラン、ナゴラン

##### ・地生植物

地生ラン(12種):ヤクシマラン、ガンゼキラン、キリシマエビネ、ナツエビネ、ナギラン、ヤクシマアカシユスラン、シュンラン、ツユクサシユスラン、アケボノシユスラン、ミヤマウズラ、シユスラン、コクランのなど

菌従属栄養植物(寄生植物)(10種):ツチトリモチ、ヤクシマツチトリモチ、ヤッコソウ、キリシマシャクジョウ、ホンゴウソウ、クロムヨウラン、ヒナノシャクジョウ、シロシャクジョウ、ギンリョウソウモドキ、ウスギムヨウラン

##### ・特筆すべき植物

標高300m以下の猪八重川沿いやその支流には、リュウビンタイ、シロヤマゼンマイ、キクシノブ、オオコケシノブ、リュウキュウコケシノブ、エダウチホンゲウシダ、カツモウイノデ、ミヤジマシダ、ナチクジャク、ケホシダ、アミシダ、コクモウクジャク、スジヒトツバ、ヒトツバイワヒトデ、ヤリノホクリハラン等の暖地生のシダ類が生育。

地理的に分布が限られているハナガガシ、ヒイラギが生育。

本保護林の下流部に当たる猪八重溪谷はコケ類の生育地として有名であり、蘚類177種、苔類116種、ツノゴケ類3種からなる豊かなコケ植物相が存在している。特にカクレゴケやヒロハシノブイトゴケ、オビケビラゴケ、サガリヤスデゴケなどのような希少種や多くの絶滅危惧種が含まれている(津藤ほか、2004)。

##### ・希少植物

環境省レッドリスト(2017年版)に掲載された絶滅危惧種が33種

(高ランク種(CR)はオオバヨウラクラン、ヒュウガアザミ)

宮崎県レッドリスト(2015年版)に掲載された絶滅危惧種が50種

(高ランク種(CR-r)はヒイラギ、キクシノブ、オオバヨウラクラン、ホンゴウソウ、ヒナノシャクジョウ、シロシャクジョウ、ヤクシマラン、キバナセッコク、クロムヨウラン、オオハイホラゴケ、ヤマハンショウヅル)

## 2 動物相

### (1)哺乳類

文献調査及び現地調査(下線部)の結果、以下の6目9科1種の哺乳類が確認された。なお、環境省レッドリスト2020や宮崎県レッドリスト2020等に掲載されている種は、コテングコウモリ、ムササビ、ニホンイタチの3種であった。

キクガシラコウモリ、コテングコウモリ、ニホンザル、ムササビ、ネズミ(spp.)、ニホンノウサギ、アカギツネ、タヌキ、ホンドテン、ニホンアナグマ、イタチ属(ニホンイタチ、チョウセンイタチ)、ニホンジカ、イノシシ

## (2) 鳥類

文献調査及び現地調査の結果、12目34科76種の鳥類が確認された。以下に令和4年度の現地調査で確認された7目20科31種を示す。なお、環境省レッドリスト2020や宮崎県レッドリスト2020等に掲載されている種は、クマタカ、ミゾゴイ、アオバズク、コシジロヤマドリ等の20種であった。

【希少種(国内及び宮崎県における)】※①種の保存法、②環境省RL2020、③宮崎県RDB2020

留鳥:コシジロヤマドリ(② NT、③NT-g)、クマタカ(①国内、②EN、③VU-g)、トラツグミ(③VU-g)

夏鳥:ツツドリ(③NT-r)、アカショウビン(③NT-r)、ヤイロチョウ(①国内、②EN、③EN-r)、サンコウチョウ(③NT-g)、  
キビタキ(③NT-g)、オオルリ(③NT-g)、クロツグミ(③NT-r)

冬鳥:ハイタカ(② NT、③NT-r)、ルリビタキ(③DD-2)

【普通種】

留鳥:キジバト、アオバト、コゲラ、アオゲラ、リュウキュウサンショウクイ、カケス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、  
ウグイス、エナガ、メジロ、ゴジュウカラ、ミソサザイ、イカル

夏鳥:ヤブサメ

冬鳥:シロハラ

【特定外来生物】

ソウシチョウ

## (3) 爬虫類

文献調査及び現地調査(下線部)の結果、以下の2目7科8種の両生類が確認された。なお、環境省レッドリスト2020や宮崎県レッドリスト2020等に掲載されている種は、コガタブチサンショウウオ、アカハライモリ、ニホンヒキガエルの3種である。

コガタブチサンショウウオ、アカハライモリ、ニホンヒキガエル、ニホンアマガエル、タゴガエル、ヤマアカガエル、ヌマガエル、カジカガエル

## (4) 両生類

文献調査及び現地調査(下線部)の結果、以下の1目3科7種の爬虫類が確認された。なお、希少種は確認されなかった。

ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、シマヘビ、ヒバカリ、ヤマカガシ

## (5) 昆虫類

文献調査及び現地調査の結果、54科221種の昆虫類が確認された(一部鰐塚山のデータも含む)。なお、希少種は確認されなかった。

現地調査で確認された種は、ヤクシマトゲオトンボ、ミヤマカワトンボ、オニヤンマ、クチキコオロギ、ヒメハルゼミ、ミンミンゼミ、シマアメンボ、サツマニシキ、アオスジアゲハ、ムラサキツバメ、ルリシジミ、アサギマダラ、ヤママユ、ベニイカリモンガ、マイマイカブリ、ニワハンミョウ、センチコガネ、ネプトクワガタ、コブマルエンマコガネ、ホンクロホシテントウゴミムシダマシ、ヤハズカミキリ、ゴマダラオトシブミ、ムネアカオオアリ、キイロスズメバチ、コマルハナバチ等63種であった。

出典:

- ・林野庁九州森林管理局(2022)令和4年度保護林モニタリング調査等及び保護林管理委員会運営業務報告書
- ・平成29年度猪八重外1地区における森林基礎調査業務報告書

管理方針書 希少-5

(新)

名 称	ぎょうじゃ 行者スギ遺伝資源希少個体群保護林	管理(支)署	福岡森林管理署
面 積 (ha)	10.90	設定年月日	1950(昭和25)年3月31日(行者杉学術参考保護林) 1993(平成5)年3月31日(行者スギ植物群落保護林)
		変更年月日	1993(平成5)年3月31日行者杉学術参考保護林を小石原林木遺伝資源保存林に再編 2018(平成30)年4月1日両保護林とも再編 2020(令和2)年4月1日統合再編
位置及び区域 (森林生態系保護地域及び生物群集保護林においては保存地区、保全利用地区それぞれの位置及び区域)	福岡県 朝倉郡 東峰村 宿平国有林 2008 に、に1、へ 林小班 花園国有林 2007 つ 林小班 山塚国有林 2007 の 林小班		

<p>保護・管理を図るべき 森林生態系、個体群 に関する事項</p>	<p>保護管理の対象個体群は、主に林齢200～400年生の個体によって構成される老齢スギ群落。保護林設定管理要領(平成27年9月28日付け27林国経第49号)第4の3の(2)のア.希少化している個体群およびエ.遺伝資源の保護を目的とする個体群に該当。</p> <p>本保護林は、福岡県東部と大分県北西部の境界にある日本三大修験道の一つである英彦山の西側に位置し、標高約500m前後の盆地となっている小石原地区に位置する。地質は火山岩である安山岩からなる。</p> <p>本保護林は、国道211号東側にある行者スギ植物群落保護林(旧保護林)の2団地と国道500号南側に接する小石原スギ遺伝資源希少個体群保護林(旧保護林)の2団地が、別々に保護・管理されてきたものを由来がほぼ同じで近接していることから、一体的に取り扱うこととして、令和2年度に統合された。</p> <p>一帯の老齢杉個体群は、鎌倉時代以降、修行者たちが奉納植樹したと伝えられており、別名「行者杉」と呼ばれ、高樹齢のもので約500年生ともいわれるが、現存林分の大部分は林齢約200～400年生のものと推定されている(旧行者スギ植物群落保護林の林齢約200年、旧小石原林木遺伝資源保存林の林齢約400年)。本保護林内には、「森の巨人たち百選」に選ばれた「大王スギ(行者の父)」があり、旧行者スギ植物群落保護林は、ヘクタール当たり1,000m<sup>3</sup>程度の蓄積を有する優良林分である。</p> <p>本保護林の保護・管理の基準・指標の一つとなる、モニタリング開始(2007(平成19)年度)以降の森林の状況は次のとおり。</p> <p>旧小石原林木遺伝資源保存林は台風による倒木等の整理が行われ、下層には広葉樹も育ち、スギ大径木を有する林分は安定していた。一方、旧行者スギ植物群落保護林は立地条件が風の当たらない凹地にあることから、大径木がひしめき合うような構造ではあったが、病虫害や気象害は認められず健全で安定していた。</p> <p>2022(令和4)年度の調査では、スギを主体とする高木層の衰退は見られず、病虫害、鳥獣害、気象害はいずれも確認されず健全であった。一方、2017(平成29)年度の調査と比較して植被率や種構成等に大きな変化は認められず、草本層の植被率は極めて低く貧弱であり、シカ被害レベルは4プロット中3プロットが3、1プロットが2の評価であった。</p>
<p>保護・管理及び利用に 関する事項</p>	<p>本保護林では、スギ老齢林の個体数の可能な限りの確保及びそれに必要な生育環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領に定められた希少個体群保護林の取扱い方針に従うとともに、これまでの保護林モニタリング調査結果を踏まえて以下のとおり取り扱うものとする。</p> <p>モニタリング結果を踏まえ、下層植生の回復及び被害拡大防止を図るため、委託捕獲や東峰村及び地元猟友会とのシカ被害対策協定により保護林周辺におけるシカ捕獲を継続して実施するとともに、スギ大径木への角擦りによる被害が目立つようであれば、単木保護資材等の活用も検討する。</p>
<p>モニタリングの実施間 隔及び留意事項</p>	<p>5年 (2007(平成19), 2012(平成24), 2017(平成29), 2022(令和4)年度実施)</p>
<p>法令等に基づく指定概 況</p>	<p>保安林(水源涵養)</p>
<p>その他留意事項</p>	<p>1950(昭和25)年3月31日 保護林(行者スギ学術参考保護林)設定 1993(平成3)年3月31日 行者スギ学術参考保護林を小石原林木遺伝資源保存林に再編(「保護林の再編・拡充について」(平成元年4月11日付け元林野経第25号)による)</p>

管理方針書 希少-28

(新)

名 称	かりまたやま 雁俣山モミ等希少個体群保護林	管理(支)署	熊本森林管理署
面 積 (ha)	70.30	設定年月日	1993(平成5)年3月31日
		変更年月日	2018(平成30)年4月1日再編
位置及び区域 (森林生態系保護地域 及び生物群集保護林 においては保存地区、 保全利用地区それぞ れの位置及び区域)	熊本県 下益城郡 美里町 七郎次国有林 1077 ね、1078 り、1079 り 林小班		

<p>保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項</p>	<p>保護管理の対象個体群は、モミ、ツガの他ブナ、ミズナラ等の落葉広葉林を構成する種。保護林設定管理要領（平成27年9月28日付け27林国経第49号）第4の3の(2)のイ.分布限界域等に位置する個体群に該当する。</p> <p>本保護林は、美里町と八代市泉町界の雁俣山（標高1,315m）周辺で、稜線の北～西斜面の標高約900mの間に位置している。急峻な南西斜面や北斜面にはツガが優占するツガ－ハイノキ群集がみられ、山頂から二本杉峠寄りの南西斜面の上部にはモミ、ツガ、ブナを主体とするスズタケ－ブナ群団が見られる。林床にはスズタケが繁茂している箇所もあるが山頂付近に近づくほど確認されなくなる。林内にはカタクリが自生し、開花時期には登山者が多い。地質は付加体で山頂部周辺と北斜面は海洋性の玄武岩層であり、南西斜面には混在岩層とチャート層が交互に現れる。また南西斜面の一部には凝灰岩層も見られる。</p> <p>本保護林の保護・管理の基準・指標の一つとなる、モニタリング開始（2007（平成19）年度）以降の森林の状況は次のとおり。</p> <p>2007（平成19）年度の調査では、ブナを主体とするミズナラ、ヒメシヤラなどの広葉樹林と斑紋上に分布するモミ・ツガが見られ、スズタケは高さ2m以上と健全な森林となっていた。スズタケの繁茂と歩道の整備により歩道外への入り込みが見られないため、カタクリの適地となっており、シカ被害もほとんど認められなかったが、2012（平成24）年度のモニタリング調査では南西斜面にある西側に膨らむような尾根の北側斜面ではシカ被害レベルが3、南側斜面では2となった。</p> <p>2022（令和4）年度の調査では、高木層において自然枯損は見られたものの全体的には健全であり、モミやツガの実生も確認され、2017（平成29）年度の調査と比較して植被率や種構成等に大きな変化は認められなかった。尾根北側ではスズタケは見られず、低木層、草本層も衰退しており、尾根南側でもスズタケは見られるものの沢筋にしか健全なものは見られず、一部の種構成の欠落が生じていたため、レベル3に近い状態と評価された。</p>
<p>保護・管理及び利用に関する事項</p>	<p>本保護林では、モミ、ツガの他、ブナ、ミズナラ等の落葉広葉林を構成する種の各個体群の個体数の確保及びこれらに必要な生育環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領に定められた希少個体群保護林の取扱い方針に従うとともに、これまでの保護林モニタリング調査結果を踏まえて取り扱うこととする。</p> <p>本保護林では、カタクリ保護のための柵が設置されている。モニタリング調査結果を踏まえ、植生回復及び被害拡大防止を図るため美里町及び地元猟友会各支部とのシカ被害対策協定による保護林周辺でのシカ捕獲の継続や新たな植生保護柵の設置を検討する。また、カタクリ等の希少種の保護のため、五家荘地域振興会との協定でカタクリの自生地に設置された既存の植生保護柵の保守点検や、盗掘防止等のための巡視を継続する。</p>
<p>モニタリングの実施間隔及び留意事項</p>	<p>5年</p>
<p>法令等に基づく指定概況</p>	<p>保安林（水源涵養）、九州中央山地国定公園（特2）</p>
<p>その他留意事項</p>	<p>2018（平成30）年4月1日 雁俣山植物群落保護林を雁俣山モミ等希少個体群保護林に再編（「保護林制度の改正について」（平成27年9月28日付け27林国経第49号）による）</p>

管理方針書 希少-29

(新)

名 称	よしむた 吉無田スギ希少個体群保護林	管理(支)署	熊本森林管理署
面 積 (ha)	11.62	設定年月日	1993(平成5)年3月31日
		変更年月日	2020(平成30)年4月1日再編
位置及び区域 (森林生態系保護地域 及び生物群集保護林 においては保存地区、 保全利用地区それぞ れの位置及び区域)	熊本県 上益城郡 御船町 吉無田国有林 1133 る、1137 ち、1139 へ、1140 ほ 林小班		



<p>保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項</p>	<p>保護・管理の対象個体群は、肥後藩の領地で水源造成のために江戸時代に植栽されたスギ老齢林。この地域では、1815年から1867年までの約52年間に340万本が植林された記録があり、本保護林は明治以降伐採されず残されているものである。保護林設定管理要領（平成27年9月28日付け27林国経第49号）第4の3の（2）のキ、その他保護が必要と認められる個体群に該当。</p> <p>本保護林は、熊本県御船町の東北部、二つ山（標高690m）の南方、八勢川の上流に位置し、阿蘇山南斜面の高原地帯で帯状になっている区域（標高500～600m）と、十文字峠の南側の区域（標高750～800m）に設定されている。林相は、100～170年生以上のスギ、ヒノキ、サワラの人工林。現在も旧藩木の老齢木として歴史を刻み、周辺では、現在も熊本市の水源地造成のため植栽が行われている。表層地質は火山灰、安山岩の溶結凝灰石からなる。</p> <p>本保護林の保護・管理の基準・指標の一つとなる、モニタリング開始以降の森林の状況を示すと次のとおり。</p> <p>保護林モニタリング着手時の2007（平成19）年度調査では、高木層はスギ、サワラ等、亜高木層はミズキ、シロダモ等が見られ、低木層にはアオキ、ネズミモチ、ヤブニッケイ等が確認された。林内には胸高直径1mを超える巨木が林立し、人工林としては稀な極相林で、健全で安定した森林であり、気象害・病虫害やシカの痕跡も見られなかった。しかしながら、2012（平成24）年度調査においてシカの嗜好性植物であるアオキの減少が確認され、2017（平成29）年度のモニタリング調査報告ではシカ被害レベル2と評価された。</p> <p>2022（令和4）年度に行われたモニタリング調査では、病虫害及び気象害、大径木の枯損や保護対象であるスギへの被害は確認されず、シカ被害レベル2が継続されていると評価された。</p> <p>しかし、アオキが完全に消失しており、ニホンジカの採食による影響は進行していると考えられる。</p>
<p>保護・管理及び利用に関する事項</p>	<p>本保護林では、スギ老齢林の個体数の可能な限りの確保及びそれに必要な生育環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領に定められた希少個体群保護林の取り扱い方針に従うとともに、これまでの保護林モニタリング調査結果を踏まえて取り扱うこととする。</p> <p>モニタリング結果を踏まえ、下層植生の回復及び被害拡大防止を図るための保護林周辺でのシカ捕獲や、スギの大径木に対する角擦りによる被害が目立つようであれば単木保護資材の設置について検討する。</p>
<p>モニタリングの実施間隔及び留意事項</p>	<p>5年</p>
<p>法令等に基づく指定概況</p>	<p>保安林（水源涵養）</p>
<p>その他留意事項</p>	<p>1957（昭和32）年3月31日設定 旧名称「吉無田学術参考保護林」 3.40ha  1964（昭和39）年3月31日設定 旧名称「吉無田風致保護林」 9.39ha  2018（平成30）年4月1日 吉無田植物群落保護林を吉無田スギ希少個体群保護林に再編（「保護林制度の改正について」（平成27年9月28日付け27林国経第49号）による）  当初設定面積12.79haであったが、平成6年～平成8年に町道路敷きとして1.17ha売払いのため減</p>

管理方針書 希少-30

(新)

名 称	<small>ないだいじん</small> 内大臣モミ等希少個体群保護林	管理(支)署	熊本森林管理署
面 積 (ha)	34.56	設定年月日	1993(平成5)年3月31日
		変更年月日	2020(平成30)年4月1日再編
位置及び区域 (森林生態系保護地域 及び生物群集保護林 においては保存地区、 保全利用地区それぞ れの位置及び区域)	熊本県 上益城郡 山都町 菅内大臣国有林 1043 た、れ、そ、1044 リ 林小班		

<p>保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項</p>	<p>保護・管理の対象個体群は、暖帯上位の代表的な林相を呈する針広混交林を構成する種。保護林設定管理要領(平成27年9月28日付け27林国経第49号)第3の(2)のウ. 他の個体群から隔離された同種個体群、及びキ. のその他保護が必要と認められる個体群に該当。</p> <p>本保護林は、九州中央山地国定公園内の天主山(標高1,494m)西方にあり、標高600m～800mに位置し、西面の緩斜地である。林相は、上部はモミ、ツガが多く、下部はモミ、ツガ、ケヤキ、アカガシ、ウラジログシ、クリ、ミズメ、カエデ等(林齢160年生以上)の優良な針広混交天然林で、中央にはアカマツと挿し穂によるスギ(胸高直径1m以上)が数本存在する。高木層の衰退は見られず、モミ・ツガの常緑針葉樹とケヤキ、クリ、サワグルミなど落葉広葉樹が林冠を構成し、老齢段階の様相を呈する。保護林内に小松内大臣重盛の霊をまつる小松神社が位置し、当神社を経て天主山など九州脊梁への登山道が設けられている。小松神社周辺森林は、平成12年4月「森の巨人たち百選」に選定されたスギ(御神木)が生育するなど、スギ林となっている。地質は粘板岩であり、土壌型は褐色森林土である。</p> <p>本保護林の保護・管理の基準・指標の一つとなる、モニタリング開始以降の森林の状況を示すと次のとおり。</p> <p>保護林モニタリング調査着手時の2007(平成19)年度調査では、モミ・ツガ・ケヤキ等の巨木が林立しており、林分構成も良く、健全な森林を形成していた。ニホンジカによる樹木への食害・剥皮被害は非常に少なかった。</p> <p>しかしながら、2012(平成24)年度及び2017(平成29)年度の調査では、ニホンジカによる剥皮被害が確認され、低木層に不嗜好性植物の侵入がみられ、草本類が非常に貧弱になっており、シカ被害レベルは3と評価された。</p> <p>2022(令和4)年度調査では、高木層の衰退はみられず、老齢段階の様相を呈していた。また、高木層構成種の後継個体としてモミの稚樹が確認された。しかし、林内は見通しがよく、草本層は植被率が極めて低く貧弱であり、前回の調査から植被率や種構成等に大きな変化は認められなかったことから、前回調査と同様シカ被害レベルは3と評価された。なお、当保護林は特別天然記念物のニホンカモシカの生息域とされ、熊本県教育委員会が別途調査を実施している。当調査で2022(令和4)年度に小松神社付近に設置したカメラにて本種が撮影されており、保護林内またはその周辺にニホンカモシカが生息していることが確認されている。</p>
<p>保護・管理及び利用に関する事項</p>	<p>本保護林では、暖帯上位の代表的な林相を呈する針広混交林を構成する種の各個体群の個体数の確保及びこれらに必要な生育環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領に定められた希少個体群保護林の取扱い方針に従うとともに、これまでの保護林モニタリング調査結果を踏まえて取り扱うこととする。</p> <p>モニタリング結果を踏まえ、山都町及び地元猟友会各支部とのシカ被害対策協定による保護林周辺でのシカ捕獲を、ニホンカモシカの生息に留意して継続するとともに、ギャップ地など森林の更新が可能な箇所における植生保護柵の設置を検討する。</p>
<p>モニタリングの実施間隔及び留意事項</p>	<p>5年</p>
<p>法令等に基づく指定概況</p>	<p>保安林(水源涵養)、九州中央山地国定公園(特3)、矢部周辺県立自然公園(特3)、鳥獣保護区(普通)</p>
<p>その他留意事項</p>	<p>1923(大正12)年3月31日設定 旧名称「内大臣学術参考保護林」  1993(平成5)年3月31日再編 旧名称「内大臣植物群落保護林」  2018(平成30)年4月1日(内大臣植物群落保護林)を(内大臣モミ等希少個体群保護林)に再編(「保護林制度の改正について」(平成27年9月28日付け27林国経第49号)による)</p>

管理方針書 希少-31

(新)

名 称	<small>ないだいじん</small> 内大臣ゴイシツバメシジミ希少個体群保護林	管理(支)署	熊本森林管理署
面 積 (ha)	97.16	設定年月日	1993(平成5)年3月31日
		変更年月日	2020(平成30)年4月1日再編
位置及び区域 (森林生態系保護地域 及び生物群集保護林 においては保存地区、 保全利用地区それぞ れの位置及び区域)	熊本県 上益城郡 山都町 菅内大臣国有林 1042 い、イ、ロ、ハ 林小班 目丸内大臣国有林 1065 い、1066 い 林小班		

<p>保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項</p>	<p>保護・管理の対象個体群は、国の天然記念物に指定され、環境省RDBの絶滅危惧 I A類(CR)に分類されているゴイシツバメシジミ及びその幼虫であり、当保護林はその繁殖地・生息地となっている。保護林設定管理要領(平成27年9月28日付け27林国経第49号)第3の(2)のア.希少化している個体群に該当。</p> <p>本保護林は、熊本県山都町の九州中央山地の国見岳(標高1,739m)を源流とする内大臣川の中流域の河川沿い急傾斜地(標高概ね600m~800m)に位置している。林相は、モミ、ツガ、ケヤキ、アカガシ、ウラジログシ、クリ、ミズメ、カエデ等の大径木が生育し、シイ・カシ類を主体とした天然林である。地質は古生層粘板岩で、土壌型は適潤性褐色森林土である。</p> <p>2012(平成24)年度の保護林モニタリング調査では、ゴイシツバメシジミの食餌植物であるシシランは、設定した2つのプロットについて、プロットNo.50201でツクバネガシ4本に計311株の群生、プロットNo.50202でウラジログシ1本に計191株の群生が確認され、シノブ、マメヅタ、キヨスミコケシノブ、シシラン等と混生していた。シカ被害については、わずかなニホンジカの糞やニホンジカによる樹皮被害木が3本確認されたが、両プロットともに不嗜好性植物、嗜好性植物のどちらも多種が確認され、林相におけるシカ被害レベルはそれぞれ0と1であった。</p> <p>2017(平成29)年度調査では、プロットNo.50201において、シシラン1株、ヒモラン2株、ナゴラン1株の着生及びミズの4種が確認された。No.50202ではシシラン4株、ヒモラン1株の着生が確認された。シカ被害については、ツクバネガシやヤブツバキへの樹皮剥ぎや、アラカシとホソバタブへの角擦りが確認された。草本類で繁茂しているのはシカの忌避植物であり、低層木以下は見通しが良く、シカ被害レベルは両プロット共に3であった。</p> <p>2022(令和4)年度の調査では、シシランは、プロットNo.50201及び50202ともに生育が確認された。ただし、平成29年度にプロットNo.50202で4株(ウラジログシに着生)の着生が確認されていたが、令和4年度は着生木のウラジログシが倒伏しておりシシランの生育は確認できなかった。また、平成29年度に確認されていたヒモラン2株(シシランと同じウラジログシに着生)及びナゴラン1株の着生も、確認されなかった。このことから、林内の乾燥化や近年の激甚災害による河川流域の攪乱が懸念される。なお、保護対象種のゴイシツバメシジミの発生確認は、2017(平成29)年度調査では雄1個体、雌1個体が確認されたが、2022(令和4)年度の調査では確認できなかった。</p> <p>また、山都町において別途ゴイシツバメシジミにかかる調査を7月から8月にかけて毎年実施しており、2022(令和4)年度の調査では成虫の雌5個体、不明4個体、幼虫3個体、卵が1個体確認された。シシランについては、指標木6本において、着生枝数が1,559本、着花枝数が121本、着花蕾数が131個、結実数が30個確認された。このほか、環境省九州地方環境事務所の保護増殖等業務における調査では、内大臣では7月に成虫の雌2個体、幼虫1個体が確認されている。</p> <p>ゴイシツバメシジミの繁殖地及び生息地について、現状は維持されていると考えられ、保護林の要件を満たしていると評価されるが、近年の大雨や着生木がウラジログシやツクバネガシ等のカシ類であることからカシノナガキクイムシによる被害など、気象害・病虫害により、食草となるシシランの着生木が倒伏することに伴う本種の個体数減少が懸念される。</p> <p>また、シカによる植生被害により、平成29年度からすでに森林の内部構造・森林が破壊された状況となっており、令和4年度の調査でも下層植生の回復等は見られず、下層植生は貧弱で林内の見通しがよく、シカによる下層植生への被害が顕著であり、シカ被害レベルは3であった。森林の内部構造が破壊された段階が継続していることから、種構成への変化や森林更新への影響が懸念される。</p>
----------------------------------	--

保護・管理及び利用に関する事項	<p>本保護林では、ゴイシツバメシジミの繁殖及び生息に必要な環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領(平成27年9月28日付け27林国経第49号)に定められた希少個体群保護林の取扱い方針に従うとともに、これまでの保護林モニタリング調査結果を踏まえて以下のとおり取り扱うこととする。</p> <p>本保護林では、平成30年度以降では、平成30年度に新規植生保護柵を設置している。モニタリング結果を踏まえ、保全対象種のゴイシツバメシジミの生息環境を改善するため、引き続き関係機関と連携して、食草シシンランの保護・増殖、希少植物着生木の倒伏防止、カシノナガキクイムシによる被害の防止、林内の乾燥化防止のための植生保護柵の設置、シカ被害木の単木的防護、山都町及び地元猟友会各支部とのシカ被害対策協定による保護林周辺でのシカ捕獲、巡視等各種対策に努める。</p>
モニタリングの実施間隔及び留意事項	5年
法令等に基づく指定概況	保安林(水源涵養)、九州中央山地国定公園(特3)、矢部周辺県立自然公園(特3)、鳥獣保護区(普通)
その他留意事項	<p>2018(平成30)年4月1日(内大臣特定動物生息地保護林)を(内大臣ゴイシツバメシジミ希少個体群保護林)に再編(「保護林制度の改正について」(平成27年9月28日付け27林国経第49号)による)</p> <p>ゴイシツバメシジミの生息地保護については、1997(平成9)年に策定された「ゴイシツバメシジミ保護増殖事業計画」(環境庁(当時)、文部省(当時)、農林水産省)により実施している。</p>

管理方針書 希少-46

(新)

名 称	<small>ふたがみ</small> 二上ケヤキ希少個体群保護林	管理(支)署	宮崎北部森林管理署
面 積 (ha)	21.08	設定年月日	1991(平成3)年3月31日
		変更年月日	2020(平成30)年4月1日再編
位置及び区域 (森林生態系保護地域 及び生物群集保護林 においては保存地区、 保全利用地区それぞ れの位置及び区域)	宮崎県 西臼杵郡 高千穂町 二上国有林 2081 ㍷ 林小班		

<p>保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項</p>	<p>保護・管理の対象個体群は、夏緑樹林を構成するケヤキが優占するケヤキ優良天然生林。保護林設定管理要領第4の3の(2)のア、希少化している個体群に該当する。</p> <p>本保護林は、高千穂町と五ヶ瀬町界の二上山(標高1,082m)の西の標高800m程度の東向急斜面に位置しており、広域基幹林道(宮崎県六峰街道)が横断している。山岳信仰の霊山として、西側には二上神社があり古くから厳しい修験の聖域の地として護られてきたが、広域基幹林道(宮崎県六峰街道)の開設以降、利用者も多い。</p> <p>林相は、ケヤキが優占する夏緑広葉樹林で、ツガ、ブナ、カエデ、ミズナラ等が混生する。一部にケヤキ人工林が含まれるものの、宮崎県内唯一の発達した天然ケヤキの自然植生や多くの好石灰岩植物を含む特異な種組成を持つ林分として非常に重要である。表層地質は中硬砂岩で土壌型は適潤性褐色森林土である。</p> <p>本保護林の保護・管理の基準・指標の一つとなる、モニタリング開始以降の森林の状況を示すと次のとおり。</p> <p>保護林モニタリング着手時の2007(平成19)年度調査では、高木層はハルニレ、オニイタヤ、ケヤキ、エゾエノキ等で、亜高木層はチドリノキ、アブラチャン等、低木層はチドリノキ、クロウメドキ、ウリノキ、ガクウツギ、ヤブデマリ等(20種程度)、草本層はヤマアイ、シコクスミレ、オオルリソウ等(40種以上)が確認されており、非常に多様性に富んだ林内構造であったことが伺える。2007(平成19)年度の調査以降、シカによる植生被害が確認されており、2007(平成19)年度はシカ被害レベル3と評価された。</p> <p>2022(令和4)年度に行われたモニタリング調査では、保護対象のケヤキを含む夏緑樹林構成種の生育は健全であり、ケヤキやサワグルミの後継個体も確認された。低木層は、ニホンジカの嗜好性植物であるアブラチャンやガクウツギに偏った種構成となっているほか、ヤハズアジサイへの剥皮が確認された。草本層ではヤマアイやジュウモンジシダ、ヤハズアジサイなど多くの種数が確認された。ニホンジカの採食による植生被害は散見されず、スズタケが繁茂している状況が確認されており、シカ被害レベル2と評価された。しかし、前回調査時から改善が見られたものの、依然として一部の種構成の欠落が生じていることから、レベル3に近い状況である。</p>
<p>保護・管理及び利用に関する事項</p>	<p>本保護林では、ケヤキが優占する夏緑樹林を構成する種の各個体群の個体数の確保及びこれらの維持に必要な生育環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領(平成27年9月28日付け27林国経第49号)に定められた希少個体群保護林の取扱い方針に従うとともに、これまでの保護林モニタリング調査結果を踏まえて取り扱うこととする。</p> <p>2022(令和4)年度のモニタリング結果において、シカ被害レベルが3から2に改善したが、種構成の一部が欠落した状態であること等を考慮し、引き続きシカ被害を注視しつつ、関係機関と連携した保護林周辺におけるシカ捕獲とともに、植生保護柵の設置について検討を進める。</p>
<p>モニタリングの実施間隔及び留意事項</p>	<p>5年</p>
<p>法令等に基づく指定概況</p>	<p>保安林(水源涵養)</p>
<p>その他留意事項</p>	<p>1930(昭和5)年3月31日設定 旧名称「二上学術参考保護林」  1991(平成3)年3月31日再編 旧名称「二上植物群落保護林」  2018(平成30)年4月1日 二上植物群落保護林を二上ケヤキ希少個体群保護林に再編(「保護林制度の改正について」(平成27年9月28日付け27林国経第49号)による)</p>



管理方針書 希少-61

(新)

名 称	ひやみず 冷水イチイガシ等遺伝資源希少個体群保護林	管理(支)署	北薩森林管理署
面 積 (ha)	13.10	設定年月日	1991(平成3)年3月31日
		変更年月日	2020(平成30)年4月1日再編
位置及び区域 (森林生態系保護地域 及び生物群集保護林 においては保存地区、 保全利用地区それぞ れの位置及び区域)	鹿児島県 伊佐市 冷水国有林 2005 そ 林小班		

<p>保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項</p>	<p>保護・管理の対象個体群は、イチイガシ、アカガシ、シラカシ、イスノキ、タブノキ、ツブラジイ。保護林設定管理要領(平成27年9月28日付け27林国経第49号)第4の3の(2)のエ。遺伝資源の保護を目的とする個体群に該当する。</p> <p>本保護林は、鹿児島県北部の伊佐市の西部で、国道267号線と出水市内の国道447号線とを結ぶ県道の間中点、標高350m～450mの南東向きの緩斜地に位置する。林相は、タブノキ、アカガシ、ツブラジイ、イスノキ、イチイガシ、シラカシ等で構成される林齢90年生以上の照葉樹林で、川内川上流域に分布する暖帯林の代表的林分である。谷筋には、環境省RDB絶滅危惧ⅠB類のチャンチンモドキの大径木が数本確認される。表層地質は古第三紀砂岩である。</p> <p>本保護林の保護・管理の基準・指標の一つとなる、モニタリング開始以降の森林の状況を示すと次のとおり。</p> <p>保護林モニタリング調査着手時の2012(平成24)年度調査では、高木層はイチイガシ、ウラジロガシ、チシャノキ、チャンチンモドキなど、亜高木層はイヌガヤやヤブツバキなど、低木層はイスノキやヤブツバキなど、草本層にはマンリョウ、イヌガシ、サンゴジュなどが生育しており、シカ被害レベルは1と評価された。</p> <p>2017(平成29)年度の調査では、林床より2m以下は見通しが良く、樹皮剥ぎが確認されたなど、森林の内部構造が破壊された状態であり、シカ被害レベル3と評価された。</p> <p>2022(令和4)年度に行われたモニタリング調査では、病虫害及び気象害、高木層での新たなニホンジカによる被害は確認されなかった。イチイガシやウラジロガシ等の常緑広葉樹の他に、チシャノキやエノキ、希少種のチャンチンモドキ等の落葉広葉樹の大径木が確認されており、成熟段階の様相を呈していた。高木層構成種の実生や稚樹はほとんど確認されなかったが、その理由として、林冠が鬱閉しており林床が暗い環境であることなどが考えられた。林内の見通しは良く、草本層は植被率が極めて低く貧弱であり、前回の調査から植被率や種構成等に大きな変化は認められなかったことから、シカ被害レベル3の状態が継続していると評価された。</p>
<p>保護・管理及び利用に関する事項</p>	<p>本保護林では、イチイガシ、アカガシ、シラカシ、イスノキ、タブノキ、ツブラジイなど常緑広葉樹林を構成する種の各個体群の個体数の確保及びこれらに必要な生育環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領に定められた希少個体群保護林の取扱い方針に従うとともに、これまでの保護林モニタリング調査結果を踏まえて取り扱うこととする。</p> <p>これまでのモニタリング結果を踏まえ、最新の調査ではニホンジカによる被害は確認されなかったものの、周辺のシカ個体群動向を把握し、下層植生回復及び被害防止を図るため、伊佐市・さつま町での自治体、地元猟友会、森林管理署との三者協定により保護林周辺におけるシカ捕獲を継続して実施するとともに、植生保護柵の設置について検討を進める。</p>
<p>モニタリングの実施間隔及び留意事項</p>	<p>5年</p>
<p>法令等に基づく指定概況</p>	<p>保安林(水源涵養)</p>
<p>その他留意事項</p>	<p>1971(昭和46)年4月1日設定 旧名称「冷水学術参考保護林」  1991(平成3)年3月31日再編 旧名称「冷水林木遺伝資源保存林」  2018(平成30)年4月1日 冷水林木遺伝資源保存林を冷水イチイガシ等遺伝資源希少個体群保護林に再編(「保護林制度の改正について」(平成27年9月28日付け27林国経第49号)による)</p>

管理方針書 希少-62

(新)

名 称	ひやみず 冷水サツマシダ等希少個体群保護林	管理(支)署	北薩森林管理署
面 積 (ha)	1.25	設定年月日	1991(平成3)年3月31日
		変更年月日	2020(平成30)年4月1日再編
位置及び区域 (森林生態系保護地域 及び生物群集保護林 においては保存地区、 保全利用地区それぞ れの位置及び区域)	鹿児島県 伊佐市 冷水国有林 2003 よ 林小班		

<p>保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項</p>	<p>保護・管理の対象個体群は、川内川流域に分布する暖帯林の代表的林分を構成する種と環境省RDBの絶滅危惧 I Bに分類されているシダ類のサツマシダ。保護林設定管理要領(平成27年9月28日付け27林国経第49号)第4の3の(2)のア. 希少化している個体群に該当。</p> <p>本保護林は、鹿児島県伊佐市の南西部、標高300～350mの北東向き傾斜地の低山地帯に位置する。林相は、川内川流域に多く分布するカシ類、シイ類を主体とする林齢150年生以上の広葉樹林分で暖帯林の代表的林分である。また、林内にはサツマシダの他、コマチイワヒトデ、エダウチホングウシダ、ホソバイタチシダ、ツルホラゴケ等約70種類のシダ類が生育している。表層地質は古第三紀砂岩である。</p> <p>本保護林の保護・管理の基準・指標の一つとなる、モニタリング開始以降の森林の状況を示すと次のとおり。</p> <p>保護林モニタリング調査着手時の2012(平成24)年度の調査では、高木層はバリバリノキ、ツクバネガシ、イスノキ、カンザブロウノキ等、亜高木層はバリバリノキ、イスノキなど、低木層はバリバリノキ、ツクバネガシ、イチイガシなど、草本層にはミヤマノコギリシダ、サツマシダ、ミヤマトベラなどが生育しており、シカ被害レベルは2と評価された。</p> <p>2017(平成29)年度の調査では、ニホンジカの忌避植物の占める割合の増加に伴い種の多様性の低下が確認され、シカ被害レベル3と評価された。</p> <p>2022(令和4)年度の調査では、病虫害及び気象害はなく、高木層の保護対象樹種の生育は健全で、林冠構成種の後継個体としてイスノキとホソバタブが確認され、草本層では希少種のガンゼキランやエビネ属の生育も確認された。低木層及び草本層の植被率は高いものの、ほとんどがニホンジカの忌避植物であり、種の多様性は低く、シカ被害レベル3の状態が継続していると評価された。サツマシダは、前回の調査で11株確認されたプロットにおいて、3株しか確認されなかった。ニホンジカが採食した痕跡等はなく、生育状況は良好であったため、本種へのニホンジカの直接的な影響はないと考えられるが、ニホンジカの採食の影響で下層植生が乏しくなったことにより、出水による流出や土砂堆積による影響を受けやすくなったと考えられる。</p>
<p>保護・管理及び利用に関する事項</p>	<p>本保護林では、川内川流域に分布する暖帯林の代表的林分を構成する種とサツマシダの個体群の個体数の確保及びこれらに必要な生育環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領に定められた希少個体群保護林の取扱い方針に従うとともに、これまでの保護林モニタリング調査結果を踏まえて取扱うこととする。</p> <p>本保護林では、平成30年度以降では、平成30年度に新規の植生保護柵を設置している。モニタリング結果を踏まえ、引き続き既設のサツマシダの生息環境保護のための植生保護柵の定期的な保守点検や巡視、職員による捕獲、伊佐市・さつま町での自治体、地元猟友会、森林管理署との三者協定により保護林周辺におけるシカ捕獲を継続して実施するとともに、地元住民や有識者からシカによる影響等の情報を収集し、植生保護柵の追加設置について検討する。</p>
<p>モニタリングの実施間隔及び留意事項</p>	<p>5年</p>
<p>法令等に基づく指定概況</p>	<p>保安林(水源涵養)</p>
<p>その他留意事項</p>	<p>1991(平成3)年3月31日設定 旧名称「冷水植物群落保護林」 2018(平成30)年4月1日 冷水植物群落保護林を冷水サツマシダ等希少個体群保護林に再編(「保護林制度の改正について」(平成27年9月28日付け27林国経第49号)による)</p>

管理方針書 希少-63

(新)

名 称	しびさん 紫尾山ブナ等遺伝資源希少個体群保護林	管理(支)署	北薩森林管理署
面 積 (ha)	32. 11	設定年月日	1991(平成3)年3月31日
		変更年月日	2018(平成30)年4月1日再編
位置及び区域 (森林生態系保護地域 及び生物群集保護林 においては保存地区、 保全利用地区それぞ れの位置及び区域)	鹿児島県 出水市 上宮岳国有林 1081 た 林小班 鹿児島県 薩摩郡 さつま町 大洞 国有林 27 か 林小班		

<p>保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項</p>	<p>保護管理の対象個体群は、シラキーブナ群集等を構成するブナ、アカガシ、アカシデ、ウラジログシ、モミ類。保護林設定管理要領(平成27年9月28日付け27林国経第49号)第4の3の(2)のイ.分布限界域等に位置する個体群、エ.遺伝資源の保護を目的とする個体群およびカ.温暖化等の影響により将来的に消失が懸念される個体群に該当。</p> <p>本保護林は、出水市とさつま町界にある紫尾山(標高1,067m)の山頂から標高900m付近までの北側斜面に位置しており、付近には上宮神社がある。紫尾山山頂まで、国道504号線の堀切峠より車道が整備され保護林の中を横断しており、登山や散策に訪れる人もいる。地質は付加体であり頁岩層(山頂等)に海洋性の玄武岩層(上宮神社付近)が挟まれている。林相は、針広混交林の天然林で、アカガシ、ウラジログシ、アカシデ、ブナ、モミ等の種で構成されている。シラキーブナ群集などの日本における分布南限の一つであり、生育本数の少ないブナの南限域の生育環境として、地球温暖化の影響等を見る上でも貴重である。</p> <p>本保護林の保護・管理の基準・指標の一つとなる、モニタリング開始以降の森林の状況は次のとおり。</p> <p>保護林モニタリング調査着手時の2012(平成24)年度の調査では、高木層はアカガシ、ウラジログシ、ブナ等、亜高木層はアオハダ、シキミ、カナクギノキ、サザンカ等で構成されていた。低木層ではシキミ、ハインキ、シロダモ等のシカの嗜好性植物がまとまって見られ、草本層は貧弱であるため、シカ被害レベル2と評価された。</p> <p>2017(平成29)年度の調査では、森林の内部構造が破壊されており、下層植生は貧弱で林内の見通しは良く、シカ被害レベル3と評価された。2022(令和4)年度の調査でも森林の内部構造が破壊された段階が継続しており、シカ被害レベル3と評価され、植被率や種構成に大きな変化は認められなかったが、高木層の保護対象樹種の生育は健全で、モミ、アカガシ、イヌシデの後継個体も確認された。これらより、保護林周辺での委託捕獲の効果があらわれ、ニホンジカの生息個体数が少ないか高頻度の利用はないと推察された。</p>
<p>保護・管理及び利用に関する事項</p>	<p>本保護林では、シラキーブナ群集等を構成するブナ、モミ、アカガシ等の個体群の個体数の確保及びこれらに必要な生育環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領に定められた希少個体群保護林の取扱い方針に従うとともに、これまでの保護林モニタリング調査結果を踏まえて以下のとおり取り扱うこととする。</p> <p>本保護林では、平成30年度以降では、令和2年度及び令和4年度に新規の植生保護柵を設置している。モニタリング結果を踏まえ、保護対象種の天然更新や林床植生の回復及び被害拡大防止を図るため、さつま町及び地元猟友会とのシカ被害対策協定により保護林周辺におけるシカ捕獲を継続して実施するとともに、植生保護柵の設置を検討する。</p>
<p>モニタリングの実施間隔及び留意事項</p>	<p>5年</p>
<p>法令等に基づく指定概況</p>	<p>保安林(水源涵養・保健)、川内川流域県立自然公園(普通)</p>
<p>その他留意事項</p>	<p>1991(平成3)年3月31日設定 旧名称「出水紫尾山林木遺伝資源保存林」  1991(平成3)年3月31日設定 旧名称「川内紫尾山林木遺伝資源保存林」  2005(平成17)年4月1日駐車場敷外として貸付のため0.08ha減(1081た)  2018(平成30)年4月1日紫尾山林木遺伝資源保存林を紫尾山ブナ等遺伝資源希少個体群保護林へ再編(「保護林制度の改正について」(平成27年9月28日付け27林国経第49号)による)</p>

管理方針書 希少-64

(新)

名 称	ヒノタニシダ希少個体群保護林	管理(支)署	北薩森林管理署
面 積 (ha)	3.27	設定年月日	1991(平成3)年3月31日
		変更年月日	2018(平成30)年4月1日再編
位置及び区域 (森林生態系保護地域 及び生物群集保護林 においては保存地区、 保全利用地区それぞ れの位置及び区域)	鹿児島県 出水市 紫尾山国有林 1057 は1 林小班		

<p>保護・管理を図るべき森林生態系、個体群に関する事項</p>	<p>保護管理の対象個体群は、環境省RDBの絶滅危惧ⅠB類に分類されているシダ類のヒノタニシダ。保護林設定管理要領(平成27年9月28日付け27林国経第49号)第4の3の(2)のア.希少化している個体群に該当。</p> <p>本保護林は、出水市とさつま町界の石堂山(標高600m)の北西約3kmの稜線上に位置し、鍋野川に流れ込む沢の上流とそれを囲む稜線を区域としている。地質的特徴としては砂岩層、多色頁岩層および頁岩層の境界となっており、断層も見られる。林相は115年生のスギ人工林であり、スギの大径木が見られる。亜高木層以下にホソバタブ、バリバリノキ、イスノキ等の常緑広葉樹が生育する。低木層にはニホンジカの嗜好植物であるイスノキ、シロバイ、バリバリノキが優占するのみで林内の見通しは良い。草本層の植被率は高く嗜好植物のミヤマノコギリシダの被覆が見られる。</p> <p>本保護林の保護・管理の基準・指標の一つとなる、モニタリング開始以降の森林の状況は次のとおり。</p> <p>保護林モニタリング調査着手時の2012(平成24)年度調査では、高木層はスギが優占し、一部にツブラジイ、ウラジロガシ等が見られ、亜高木層はカゴノキ、ホソバタブ、バリバリノキ等、低木層はイスノキ、サカキ、イヌガシ等、草本層はミヤマノコギリシダ、イズセンリョウ、サザンカ等で構成。地被植物はシダ類が主で種類も多く、ヒノタニシダも林内に点々と存在が確認された。ニホンジカの嗜好性植物の優占が見られ、シカ被害レベルは2と評価された。</p> <p>2017(平成29)年度の調査では、2プロットでヒノタニシダ38株が確認され、シカ被害レベル3と評価された。</p> <p>2022(令和4)年度の調査では、前回の調査でヒノタニシダが10株確認されたプロットにおいて、4株しか確認されなかった(もう一つのプロットは調査未実施)。また、低木層はシカの嗜好植物であるイスノキ、シロバイ、バリバリノキが優占するのみで林内の見通しは良く、さらに草本層の植被率は高いものの嗜好植物のミヤマノコギリシダの被覆が見られることから、シカ被害レベル3が継続していると評価された。気象害や病虫害は確認されず、林内照度の著しい低下もないことから、ヒノタニシダの衰退要因としてはニホンジカによる食害が考えられた。</p>
<p>保護・管理及び利用に関する事項</p>	<p>本保護林では、ヒノタニシダの個体群の個体数の確保及びそれに必要な生育環境の維持を目標とし、保護・管理及び利用に関する基本的な事項については、保護林設定管理要領に定められた希少個体群保護林の取扱いの方針に従うとともに、これまでの保護林モニタリング調査結果を踏まえて以下の通り取り扱うこととする。</p> <p>モニタリング結果を踏まえ、ヒノタニシダを含む下層植生の回復及び被害拡大防止を図るため、委託捕獲やさつま町及び地元猟友会とのシカ被害対策協定により保護林周辺におけるシカ捕獲を継続して実施するとともに、シカ被害の影響が考えられる箇所を優先的に植生保護柵の設置を検討する。また、地元住民や有識者による現地状況の確認、自動撮影カメラの活用等、ヒノタニシダに対するニホンジカによる食害等の影響の把握手法について検討する。</p>
<p>モニタリングの実施間隔及び留意事項</p>	<p>5年</p>
<p>法令等に基づく指定概況</p>	<p>保安林(水源涵養)</p>
<p>その他留意事項</p>	<p>1991(平成3)年3月31日 樋ノ谷学術参考保護林を樋之谷植物群落保護林に再編  2018(平成30)年4月1日 樋ノ谷植物群落保護林をヒノタニシダ希少個体群保護林に再編(「保護林制度の改正について」(平成27年9月28日付け27林国経第49号)による)</p>